

ことわざ 1 ハジメ

KOTOWAZA
LYRIC

ことばの魔法使い、
参上!

遠藤まり ◆ 作

ふじつか雪 ◆ 絵



目次

❀ 願いはわざわいのもと!? 編

167

第9話 金ピカのしっぽと私の願いごと

第10話 言葉がうばった、クリスマス

第11話 ことワザ大決戦!?

第12話 取り戻した、メリークリスマス

おまけ それぞれの冬休み!そして。

❀ ことワザ使い、デビューします! 編

5

第1話 不思議なノートと動物たち

第2話 失敗続きの大山先生

第3話 田中くんのラブレター!?

第4話 健斗のホントの気持ち

❀ 恋と友情とことノケと 編

65

第5話 ことノケぞろいのハロウィンパーティー!?

第6話 心が近づく注意報!?

第7話 恋と友情とマコ様と!?

第8話 人間関係、大警報!?

ことわざ^{つか}使い、
デビューします！
編



しのめ
東雲

しんじや かみ こと たまさま つか しんまい
神社の神・言玉様に仕える新米ヤタガラス。
ノートから逃げ出したことノケたちを探す、
りり あいぼう そんざい
凜々の相棒のような存在。

き と せ り り
木戸瀬 凛々

こと の はしやうがう とう かよ しやうがく ご ねんせい
言ノ羽小学校に通う、小学五年生。
しんゆう ひ こ かつどうちゆう
親友の引っ越しでソロ活動中。
ひ しんじや ふ し き ひろ
ある日、神社で不思議なノートを拾って……



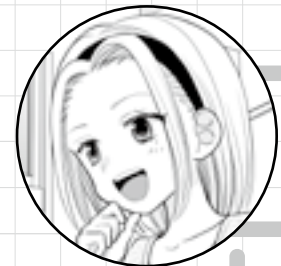
とう じやう じん ぶつ
登場人物



おか やま けん と
丘山健斗



しず み み おり
静海深織



たに やま か の
谷山香乃

第1話 不思議なノートと動物たち

暑い日とすずしい日があったり、きたりの秋——今日は秋の遠足。

花より団子な私はつらい山登りをして見る絶景よりも、その後の梨狩り派！

自分でとって食べた梨は果汁たつぷりで、あまくておいしかった！

バスで学校に戻ってきたら、やうつと解散……よし、練習通りに言うよ！

「あのね」と、グループの子たちの顔を見回し、私は口角と右手をピツと上げる。

「今日は楽しかったよ、グループに入れてくれて、本当にありがとう！」

「そ、それなら木戸瀬さん、明日からもわたしたちのグループで……」

まさかのおさそいに心臓がズキンと跳ねるけど、気にせず、笑顔のまま、回れ右。

「ありがとう、静海さん。わたしはだいじょうぶだよ。じ、じゃあね！」

「あつ、こら凜々！ 静海さんからのせっかくのチャンスを……」

「今はまだいいの！ また明日ね！」

物言いたげな静海さんと幼なじみの男子・健斗——クラスメイトの声を振り切って、私は
言ノ羽小学校の校門を飛び出す。

初めまして。私は木戸瀬凜々。言ノ羽市立言ノ羽小学校に通う、小学五年生！

どうして、ひとりで行動してるのかって？

それは仲よしだった友だち・瑞花が一学期で遠くの街に引っ越した影響でぼっち……じゃなく、ソロ活動中なんだ。

今みたいに健斗をはじめ、まわりの子たちから「新しい友だち作らないの？」と、聞かれるけど、今はまだいいんだ。ひとりでいる時間も大事、でしょ……？

通学路の十字路を曲がった時、目の前に黄色い看板が立ちふさがった。

「ええっ、工事で通行止め？！」

通せんぼするように置かれた工事中の看板。朝、登校した時はなかったのに！

家に帰ったら、動画見たり、ゲームをしながらおかしを食べたり。

ママが仕事から帰ってくるまで、一分でも長くのんびりしたかったのにな。

もう、しょうがない。来た道を引き返していると曲がり角の先からひびく、クラスメイトの笑い声に足がピタリと止まる。

「あははー、すごい！」

あの声はクラスのボスキヤラ的存在・谷山さんとそのグループの子たちの声！

私はとっさに工事中の看板の裏にしゃがんで、身をかくす。

（瑞花がいたら、明るい自分を演じなくても、楽しい遠足になったのかな……？）

……つて、しっかりして私！ うらやましくも、さみしくもないんだから。だけどね……

いつもはあまり話さない子たちのグループに入れてもらうのつて、緊張するし、気をつかうしで、心も体もヘロヘロのクタクタ。だから気持ちがグラグラ、ゆれ始める。

瑞花の転校をきっかけに、しばらくひとりであるつて決めたのに。

楽しそうにしている子たちを見ると、後ろめたい気持ちになる。

そんな打たれ弱い自分がイヤになる。

「人間関係が気にならないくらい夢中になれること、見つからないかな……」

前向きになりたくて、視線をつま先から空へ上げた、その時……

「承知した！」

視界のすみ、電柱のてっぺんに止まっていた鳥がバサリ！

大きな翼を広げて飛び立ち、こっちに目掛けて、急降下っ！

「ええええええ、なんでっ!？」

モタモタしているうちに鳥はグングン近づいてきて、ふわりっ。

私の目の前でまた、急上昇……あれ？ なにか頭が軽くなったような。

手を頭にのせて、ハッとする——通学帽子がないっ！

ハッと空をあおぐと、通学帽子をつかむ、大きな鳥の姿が目に見え込んできた。

「ま、待って！ 通学帽子、返してええええええ!!」

看板から飛び出して、クラスメイトたちを追いぬいて、私は全力猛ダッシュ！

鳥のあとを追いかけて、やってきたのは入口に立派な鳥居が立つ、言ノ羽神社。

言葉の神様・言玉様がまつられている、言ノ羽市で一番大きくて有名な神社。

（低学年のころ、竹林をヒミツ基地に決めて、瑞花や健斗とよく遊んだなあ……）

今はちよつと、行きづらい場所だけど、通学帽子は取り返さなきゃ。

覚悟を決めた時、鳥がチャリ——赤い顔を私に向けてきた。

「ええつ、カラスじゃないの!? ツバメ……でもないよね?」

天狗みたいに顔がまっ赤な鳥、他にいるかな?

この神社には言玉様と、言玉様に力を貸す天狗とカラスがいる。

伝説を元にした劇を神社のイベントで見たことがあるけど、あれは伝説……まさか、ね。

鳥は境内の奥へ、奥へとすべるように飛んでいく。

も、もしかして、あの鳥が向かう場所って——イヤな予感的中!

鳥がポトツと帽子を落としたのは、ヒミツ基地だった、あの場所。

小さなお社がポツンと立つ、うす暗い竹林の中!

「もう、どうしてここなの……?」

切なくなり、泣きたい気分で、空を見上げる。

カラスより大きくて顔が赤い、天狗っぽいナゾの鳥は空のかなたへと飛んでいく。

（この場所に落としたのは、偶然だよね……?）

おそろおそろ、お社の前に落ちた通学帽子を拾い上げて——あれつ、なにこれ?

帽子の下にあったのは、一冊のノート。

動物たちの絵が色々かいてあって、ずつと見ていたくなるような、不思議な感じがする。

ちよつとこわいけど……気になるっ!

思いきって拾ったノートの表紙には『言玉神の眷属・言ノ怪之書』と、書かれている。

「ことだましん……の? もうつ、難しい漢字が多くて、読めないよ!」

言玉神は言玉様のことだよな? 神社のヒミツが書いてあるのかな?

宝石や宝物の地図だったら、健斗に教えてあげなくちゃ。

ワクワクしつ、ページをめくると、パアアアッ……!

ノートの中から風と白い光があふれ出す——わわつ、超まぶしい!

目をとじると、ズンッ! 急に不思議なノートが重くなった。

どうして? と思わず目を開けて……飛び込んできた光景に目を疑う。

「ええええ……っ、な……にこれ……っ!」



ウマにスズメにカップパに小人のおじいちゃん！

光るノートの前から半透明の生き物が次々と飛び出し、空のなたへと消えていく。

プラネタリウムを見ているみたい。幻想的でとてもきれい。

見とれていると、ノートからの光と風が弱まっていく。

今のすごかった。来年のお祭りでやる、光のショーとかかな？

しかけが気になり、中身が真っ白なノートをめくっていると。
「ンツギヤアアア〜、心の準備がまだナノに、ナニやってくれてんノッ!?」
頭上から降るキンキン声。だ、だれっ!?

上を向くと目を三角にした、小さなカラスとパチリと目があつた。

「カ、カラスがしゃべった……これも不思議なノートのしかけなの?」

キツネにつままれた気分でいると「ちがうノ、本物のヤタガラス、ナノ!」

カラスが黒い翼を広げ、私の目の前にせまる。

「大変なことになったノ、やらかしてくれたノ! しつかり責任とってもらうノ!」

「責任って言われても……あなた、何者? ヤタガラスって、カラスとちがうの?」

「ちがうノ。ヤタガラスは神様に仕えるスゴいカラスナノ。ンで、ナノは東雲。この神社の神・言玉様に仕える新米ヤタガラス、ナノ。ほら、その証拠に足も三本あるノ」

カラスの東雲は得意げに三本の足をピツと突き出してくる。たしかに三本ある。

「前にお祭りで聞いた伝説は本当だったんだね、すごい。私の名前は木戸瀬凛々だよ」

「……知ってるノ」と意味深にうなずく東雲。どうして私の名前を知ってるの?

聞くより先に東雲が険しい目つきのまま、くちばしを開く。

「ンじゃ早速本題。凛々はことノケ帳を開き、中にいたことノケたちを逃がしちゃったノ」

「ことノケ帳にことノケ……ことノケ帳はこのノートかな?」

持っていたノートを開いて見せると、東雲は力強くうなづく。

「その通りナノ。ンで、ことノケとは言霊ことだまの力を宿やどした動物たち、神獸しんじゆうナノ。本来なら儀式の後にことノケたちを外に出すけど、さつき凛々がことノケ帳をいきなり開けたから、みんな逃げ出しちゃって、中はほら、真っ白、大変ナノ!!」

さつき見た光り輝く動物たちがことノケだったんだ。

正体を知り、さーっと血の気が引いていく。だって、だってさー!

「そんな大切なもの、地面に落としておかないでーっ!」

「だから言葉の魔法使い・ことワザ使いになつて、ナノといっしょにことノケを探さがしてもらうノ!」

言葉の魔法使い……言葉。心臓がドクンと跳ねて、苦い記憶きおくがよみがえる。

夏休み前。今立っているこの竹林——ヒミツ基地で、私は友だち・瑞花とケンカした。

お父さんの仕事の関係で、一学期が終わったら転校。

言ノ羽市から別の街へ引越すと決まっていた彼女は転校にすぐ前向きだった。

「次の学校は校舎こうしゃが新しくて、きれいなんだ」

「モデルやつてるイケメンがいるんだって」

「給食も豪華ごうかなんだって、楽しみ!」

自慢話じまんばなしやマウントばかり。私とさよならするのは、平気みたい。

さびしいのは、きつと私だけ——それが悲しくて、ムカついて、カツとなつて。

「そんなに楽しみなら、明日から転校すればいいじゃんっ!」

ハッと気づいた時に見た、瑞花ずいのがく然ぜんとした表情ひょうしつは今も覚おぼえている。

しまった、言いすぎた……とすぐに思った。

だけど、モヤモヤとチクチクした気持ちも自分の中にたしかにあつて。

その日は逃げるように家に帰ってきてしまった。

でもだんだんと「よくなかった」と、謝あやまりたい気持ちがあふらんできた。

だから次の日「ごめんね」と言うつもりだった。でも瑞花からふいつと目をそらされ、谷山さんから「木戸瀬さん、ひどーい」と責められて、謝るのがこわくなってしまった。

声にした言葉はすぐ空気にとけて消えてしまうけど、言った事実は消せないんだ。

そして強い言葉は一瞬いつしゆんで、それまでの関係や友情ゆうじゆうを壊こわしてしまう。そう思い知った。

こうして、ギクシヤクした関係のまま、一学期が終わりをむかえ、バイバイ。

「友だちにひどい言葉をぶつけた私が言葉の魔法使いになる資格なんて、ないよ」
罪悪感からうつむくと、ツンツ。東雲が「知ってるノ」と私のつま先を優しくつつく。

「言玉様は言ノ羽市の神様、この街の人たちの会話を見守っているノ。ンで、言ノ羽神社はナノたちのおひぎもと。ナノもその時の会話、一言一句覚えてるノ。たしかに強くて、するどい言葉だったノ。けどそれをかえりみて、真剣に悩む凛々だからこそ」

「神さまに一言一句聞かれていたなんて、もつと無理つ。だから……っつ、ごめんね！」

「ちよつと、ことノケを放っておくと大変なことが起きるノ！ 適材適所の適任ナノッ！」
もう、いたたまれないっ！ 東雲のさげびを振り切り、私は全速力で家に帰る！

ボタンッ！ 玄関のドアを勢いよく閉めて、ぜくはくすくはく……深呼吸。

パパもママもまだ会社で仕事中。ひとりきりの家に自分の呼吸がよく響く。

「大人になつてもずっと友だちつて、約束したのになあ……」
私のたつた一言でくずれた友情。

健斗たちは「連絡したら？」と気軽に言うけど、今ごろ転校先で新しい友だちやイケメン

と楽しくやっているはずだし……私から連絡するのも、ちよつとちがう気がして。

ヒドいことを言つたつて思うよ。けど、なんで瑞花はあんな態度をとつたの？

素直になれない私が言葉の魔法使いになんて、ふさわしくないよ。

第2話 失敗続きの大山先生

次の日の朝。私はドキドキハラハラ、緊張しながら家を出る。

通学路のとちゅうにある、言ノ羽神社で東雲が待ちぶせている気がして……
けど、その不安は取り越し苦労。神社の前を通つても、何もなし。

（大変なことなんて起きてないし、昨日の出来事はきつと夢。寝ぼけてただけ）
遠足の間は気を張つてたし、山登りして体力も使つて、つかれてたし。

ヘンな夢だった。ホツとしながら、五年二組の教室に入ると。

「おはよう凛々、今日の体調は？」

今、自信を持って友だちと呼べる唯一の男子・健斗が声をかけてくる。

彼は私が住んでるマンションのすぐとなり立つ『丘山クリニック』の息子で「将来のため」とみんなの健康管理をする、お兄さんのな面もあつて、係はもちろん、保健係。

「うん、いつも通りだよ」

昨日、ヘンな夢を見て、少し寝不足だけど——心の中で付け足した時、ガラッ！担任の大山先生が教室に入ってきて、ざわついてた教室がしんと静かになる。

「えっ、朝の会のチャイム、まだですよ？」

「……というか先生、そのTシャツ、どうしたのー？」

みんなのとまどいが教室じゅうに広がっていく。私も目をぱちくりさせる。

大山先生は背が高く、マジメでしっかり者な先生。

昨日の遠足の日もスーッ姿、といつもピシッとするタイプの先生なんだけど……

今日はTシャツにジーンズ姿で寝グセも跳ねていて、肩にはぬいぐるみをのせている。

「あれ、鳴ったと思ったんだが……うーん」

先生が首をかしげた直後「今からだよ」と言うように、キーンコーンカーン！

始業チャイムが鳴り始める。みんなが席に戻り、先生が教壇に立つ。

すると、ピョコッ！

ぬいぐるみだと思っていた、カップが立ち上がった！う、動いてるーっ！

だけど、健斗やクラスのみんなは無反応。気づいていないのかな？

「先生、どうしたんだろ？」

「まだつかれてるのかなー？」

先生の様子がいつもとちがうことだけが気になるみたい。

なんで、どうして？ カップのほうが気になるじゃん!? ……と、その時。

「これはことノケのしわざ、ナノ！」

机の中から聞き覚えのある声が出た。

ま、まさかこの声って!?

中をのぞきこむと、昨日神社で会ったヤタガラス・東雲が机の中に入っていた！中で黒い体はべっしやんこ。すぐく、きゆうくつそう。

「おはよ。凛々が引き受けるまで何度でも、ゼッタイ逃がさないノ！」

「うっ、わあああああゝゝ！ 出たあゝゝゝっ!!」

「木戸瀬さん!」と、先生やみんながいっせいに私を見る——しまった!

「あははは……見まちがいです。だいじょうぶです!」

笑ってごまかしてから、机の中をもう一度、そつとのぞきこむ。

「や、やっぱり昨日のクラス……どうして学校に、私の机の中にいるの!」

「百聞は一見にしかず。説明するより見せるほうが説得力あるノ。まず、ことノケはナノと、ことノケ帳を開いた凛々にしか見えないノね。ンで、あの先生の肩の上にいるのはカッパのことノケ・殿。ことノケ帳から出てすぐ、先生に取りついたノね」

「取りつくつて、幽霊みたいな……先生は一体、どうなっちゃうの?」

東雲が「まあ見てるノ」と意味ありげに笑った時、またチャイムが鳴る。

「よし、じゃあ算数の授業を……しまった、これは国語の教科書だった」

大山先生は頭をかき、本だから予備の算数の教科書を取り出す。

しっかり者の先生が教科書をまちがえるなんて、今までなかったのに……

本当にことノケのしわざなの? 机の中から顔をのぞかせる、東雲に視線を落とす。

「ことノケは言霊の力を宿した神獣。自分と関係する言葉の魔法・ことワザが使えるノ。先生は今、ことワザ『河童の川流れ』の影響を受けてるノね」

「カッパの川流れて、その道の達人でも時には失敗するって意味だっけ?」

「そうナノ。ンで、ことワザとしての効果は達人……いつも当たり前に行えることほど、失敗するようになってしまうことワザ、ナノ!」

不安をあおってくる東雲の言う通り、まず一時間目の算数の授業で。

「先生、三角形の面積は底辺×高さ÷2です。今、先生は÷3にしています」

「ええっ、あ……しまった。そうだな、÷2だな」と、式を書きまちがえて。

二時間目の国語の授業では「日本が目本になってるよー!」と、漢字を書きまちがえた。あわてて書き直す先生に「しっかりしてー!」と、みんなからブーイングが飛ぶ。

「先生のミスの連続って、私がことノケたちを逃がしたから、だよね……?」

「十中八九そうナノ! だから凛々がことワザ使いになって、先生を助けるノ!」

机の中からくちばしで、ツンツン。私のお腹を急かすようにつついてくる。

「私にはことワザ使いになる資格、一ミリもないから……東雲だって、知ってるでしょ?」

「なら、このまま放つとくノ？ 取りつく時間が長くなればなるほど、ことワザの効果……失敗が大きくなったり、事故にあつたりと大変な目に合うノ！ たしかに声にした言葉はもう消せないノ。でも大事なものは、直せない過去より、変えていけるこれから、ナノ！」

東雲の真剣な声音に心臓がドキリと鳴る。

瑞花にひどいことを言った、夏のあの日からずっと毎日、思い出し続けて。

今日もこうやって、きつと明日も気にし続けてしまう。

その時、バツタン！

先生がなにもない場所でハデに転び、肩に乗るカップパがピョンッと頭に飛びうつる。

「先生、だいじょうぶですか？」

「おい健斗、先生を診てやれよ」

「いや、平気だから。昨日の遠足のつかれが残っていて……ははは」

力なく笑い、立ち上がる先生は失敗続きな自分にあきらかに動揺している。

先生の頭の上でカップパが「よしよし」と、頭をなでている——キミのせいでしょう！
小さく指をさしながら、考える。



このまま知らんぷりをして、先生が階段から落ちたり、交通事故にあつたりしたら？
……私はきつとまた、後悔して。毎日悩んで、引きずる。

「……うん、先生を助けよう」

見て見ぬフリはできないから——
決意して両手をグツとにぎりしめる。
その時、キーンコーンカーン！
二時間目の授業が終わり、休み時間が始まる。

先生は「三時間目は音楽だぞー」と言い残し、教室を出ていくけど。

「いいえ、理科です」とすぐにツツコミが入り、先生はガクリと肩を落とす。

私はギュウギュウづめの東雲を机

から引っぱり出すと、上着の中にかくし、教室を出る。

先生が向かった先は職員室……ではなく、校舎裏。イスに座り、長いため息をつく。いつもピシツとした先生がひっそりと落ちこんでいる。今すぐ、助けるからね！

「それで東雲、どうやってカッパのことノケをつかまえるの？」

「準備万全、こうするノ！」

建物のかげで東雲が黒い翼を広げると、ポンツ！

私の目の前に、赤と白の水引と鈴がついた破魔矢が現れた！

そつと手に取ると矢は羽のように軽く、シャランと優しい鈴の音がひびく。

「この破魔矢は言玉様が作った、言葉の力が宿った杖なノ。まずは耳をすますノ。破魔矢を通して、言玉様が凜々だけの呪文を覚えてくれるノ！」

言玉様の声が聞こえるって、本当？ 半信半疑のまま、私は破魔矢を見つめる。

校庭で遊ぶみんなの声や近くを走る車の音が遠のいていくような感覚がして、はらり。

羽根のように真つ白な葉っぱが破魔矢をにぎる私の手に落ちる。すると。

『凜々の名前は凜々しいって言葉が由来なのよ。どんな時も勇気を持つ子でいてほし

いって』

頭の中でお母さんの声がした。

前に学校の宿題で自分の名前の由来を聞いた時の言葉だ。

言玉様は言葉の神様。この街の人たちの会話を见守るように聞いていて、それを私に伝えるようにしている気がする。

手の甲の上で白い葉っぱは雪のようにとけて、消えていく。

どんな時も勇気を持つ子——瑞花に「ごめんね」を言えないままで、全然そんなことないけど、これからは勇気を持つ、ことワザ使いでいたい！

「凜々、東雲やことノケをお願いしますね。あなたは言葉の大切さに気づいているから」

頭の中に優しい声、別の声も聞こえてきた。きつと、この声が言玉様なんだ。

逃げたことノケを全員つかまえられるのか。本当は自信がないけど……

「はいっ」

破魔矢を見つめ、返事をする、難しい問題の回答がひらめくように、フツと言葉が浮かんできた。これが私の呪文——よしっ！

「凜々しくリリース、ことワザリリック！」

先生に破魔矢を向けて、呪文を唱えようと目の前にことノケ帳が登場する。
シューウウ〜ポンツ！

先生の肩に乗るカップパが、ことノケ帳の中に吸いこまれていった。

「やったノね凜々、ことワザ使い誕生ナノ！」

東雲が「始めの大きな一步ナノ！」と左右の翼を叩いて、大よろこび！

「本当にこれでカップパをつかまえたの？」

ドキドキしながら、ことノケ帳を開くと——いたっ！

今まで真っ白だったページにカップパの絵がふえていた。

動画みたいに短い手足を動かしておどっている。かわいい〜！

「あれ、木戸瀬さん、こんなところでどうしたんだい？ それはシール帳かな？」

すぐ後ろで先生の声がして、心臓が飛び出しそうになる。

「え〜っと、先生だいじようぶかなって……学校散歩のついでに、様子を……」

破魔矢とことノケ帳を背中にかくし、私は笑ってごまかす。

「ありがとう。一息ついたら体が軽くなったから心配無用だよ。だから外で遊ぶのもよし、シール帳を見せ合うのもよし。木戸瀬さんは明るいから、みんなとすぐ仲よくなれるよ」

二学期が始まってから、私がひとりでいるのを先生も気にしているのは視線でわかる。

だけど、またカッとなったって、瑞花のようにだれかを傷つけるかもしれない。

だからね。次の友だちは気持ちのブレーキをかけられるようになってから、作る。

今はまわりを困らせないよう、明るい自分を演じている。先生にはバレてるかもだけど。

職員室に戻る先生を見送ってから、私はもう一度、破魔矢とことノケ帳を見つめる。

「今日から私はことワザ使い……ことノケ集めに夢中になるよ！」

悩みに負けないくらい、無我夢中になること、やっと思つけた！

秋の空に向け、力いっぱい破魔矢をかかげていると「カップパ〜ッ！」

ことノケ帳の中から元氣よく飛び出してきたのは、捕まえたばかりのカップパのことノケ！

「余の名前は殿。凜々殿、これからよろしゅうたのむぞ！」

大きさはブドウ一房分。小さくてかわいいのに、映画やゲームに登場するサムライのようにシブい話し方で、ギャップがある。

大山先生が座ったイスにちょこんと座り、深々と一礼する殿。礼儀正しいなあ。

「殿は川の事故で命を落とした、さる大名の息子の魂から生まれたことノケ。物知りでたよりになるノ！」

「縁の糸がたぐり寄せたのか、凜々の組にはことノケに取りつかれた者がまだ数名おる。ことワザ使いになったのなら、基本的なことワザ・体にまつわることワザが使えるようになったッパ。それを使い、早速……」

ギクリッ！ 私はおそろおそろ、手をあげる。

「じ、実は私、国語がそんな得意じゃなくて……漢字のテストなんて、毎回真っ赤で」

「……………なっ、なんじゃとおお……っ!? なにゆえそのような子をことワザ使いに？」

数秒の沈黙の後、クワツとくちばしを開き、さげぶ殿。

「それはこれから勇住邁進、勉強すればいいノ。凜々、ことノケ帳をちよつと貸すノ」

東雲がヤタガラスの証である三本足でことノケ帳をつかんで振ると、ひらり。

ページの間から黒い葉っぱが舞い落ちる。なんだろうこれ、枯れ葉かな。

拾い上げた瞬間、心臓が冷たく脈打って、そして。

『そんなに転校が楽しみなら、明日から転校すればいいじゃん！』

瑞花にぶつけた言葉が頭の中にひびき、葉っぱは砂のようにくずれていく。

「今のは言ノ葉。言ノ羽市で声にした言葉は葉っぱになって、言玉様の元に届くノ。ンで、発言した人のその後の気持ち……今の言ノ葉は凜々の苦悩や後悔に合わせて、葉っぱが黒くなったノ。凜々は言葉の大切さに気づき始めているからこそ、この子について、思ったノ！」

「なるほど……言葉の大切さを伝えたくて、凜々を選んだということか」

東雲と殿の話を聞いて、今まで以上に言葉を大切にしよう。そう胸に誓う。だけど。

「うむ、ならば一人前のことワザ使いにするため、国語の勉強をさせねばな！」

「うええっ、勉強……!?!」

「当然じゃ。ことわざを知らねば、基本的なことワザを使えんじやろう？」

「それならチュンをつかまえるチュン！ シノちゃ……んっ！」

近くの木の上から声がしたと思ったら、シユタツと一羽のスズメが地面に降り立つ。

「スズメがしゃべってる……東雲、この子もことノケ、なの？」

「鳥のことノケ・鈴ナノ！ いつもはスズメの姿だけど、色々な鳥に姿を変えられるノ！」

「スズメの姿が一番好きだッチュン♪ チュンはシノちゃんを困らせたくなくて、この子がことワザ使いになるまで、木の上で羽休めをして待ってたチュン！」

「ありがとナノ。鈴はマブだち、知己朋友。持つべきものは友だち、ナノ！」
体をスリスリ、すりあわせる東雲と鈴。仲よしなのはいいことだけど……

カッとなつて、冷たい言葉を言わないよう——気持ちのブレーキができるまで、友だち作りをお休み中の私は二羽からそつと視線をそらす。

「さあ、チュンをつかまえるチュン！」と、足元にやつてきた鈴が小さな翼を広げる。

「チュンをつかまえると、鳥についてのことワザが使えるようになるチュン！ まずは、一度身につけた習慣や知識はずつと忘れなくなる、チュンのことワザ『雀百まで踊り忘れず』で、基本的なことわざや慣用句をばつちり覚えるチュン！」

「すごい！ それなら、これからの勉強がラクになるね！」

善は急げだね。期待に胸をはずませ、持っていた破魔矢をそつと鈴に向ける。

「いくよ。凛々しくリリース、ことワザリリース！ おかえりください、鳥の鈴！」

シューウウウッポンッ！

鈴がことノケ帳の中に吸いこまれるのを見とどけてから、私はかけ足で図書室へ。

まずはことわざを覚えないとね！

『ことわざ・慣用句辞典』を借りて、また人気のない校舎裏に戻り、破魔矢をかかげる。

「凛々しくリリース、ことワザリリース、スズメ百まで踊り忘れず！」

「おどるチュン！ チュッチュチュン♪」

ことノケ帳から勢いよく飛び出た鈴がナゾのダンスを始める。

その横で借りてきた辞典を読み始めると、馬の耳に念仏、弘法にも筆の誤り、猿も木から落ちる、牛の涎、虫の息、猫の手も借りたい、などなど。

本の内容がどんどん頭の中に入っていく、私の一部になっていく。

不思議な感覚、もう一生忘れる気がしないよ。これがことワザの力、スゴいっ！

「このことワザを使えば、算数の公式も英語の単語も、アッという間に覚えられるね！」

「人生は一度きり。百歳になれるのも一回だけ……だから、このことワザも一回しか使えないチュン。ごめんっチュン」

「千里の道も一歩から……他の勉強は地道にはげめッパ」

「ええ〜つ、そんなあ……」と、しょんぼりしていると、パチパチパチ!

突然、後ろからひびく、拍手の音。「だれ!」と振り返って、ビックリ!

鼻が長い、天狗のお面をかぶった着物姿の大人が立っていた。

校舎裏だつて、学校の中なのに、ア、アヤしすぎる!!

「初めまして。我が名はル……」

「ふ、不審者〜つ! せ、せんせ〜……!」

「待つノ! あの方は言玉様に仕える天狗……様ナノ。昨日、鳥の姿で凜々の帽子を言ノ羽神社に勝手に運び、凜々をことノケ帳まで導いた人ナノ!」

「そうだった。あの時の鳥、この天狗様のお面みたいに顔が赤かった!」
私の目の前で黒い翼をバサリと広げる東雲。でもその表情はなぜか不満げ。

「……本当はナノが凜々と運命的な出会いをして、ことノケ帳まで導くハズだったの」

「ええつ!? それならどうして天狗様が……?」

「今ではないと、二の足を踏んでいるからです」

お面の下から男の人の低い声がひびく。

この声は昨日、看板の裏にかくれている時に聞いた「……承知した!」と、同じ声!

「東雲はまだ新米ヤタガラス。金のヤタガラスになるには己が選んだ、ことワザ使いとことノケを集める修行にはげまなければなりません。なのに『**待てば海路の日和あり**』と言いかけてをし、なかなか行動せず……チャンスの神様は前髪しかないのですよ?」

「知ってるノ。チャンスの神様が走り去ったなら、前髪を引つこぬきに追いかけるノ!」

「その意気です。さあ凜々さんがなぜ、ことワザ使いに選ばれたかのご説明を」

スツと広げた手を私に向ける天狗様。東雲はキツと真つ直ぐに私を見上げる。

「順番が逆になつて、ごめんナノ。シノは世のため、人のため、言玉様のため。神様にお仕えする眷属の試験に合格し、夏前に言ノ葉神社にやってきた新米ヤタガラス、ナノ。でも試験に合格しただけじゃダメで、ナノが選んだことワザ使いの子と力をあわせて、ことノケの試験に臨まないと、新米から一人前のヤタガラスになれないノ」

ことノケの試験つて? 私は首をかしげながら、殿と鈴を見る。

「新米ヤタガラスが本当に言玉様に仕えるのにふさわしいか。言玉様の眷属である我ら、ことノケが試す儀式のことツパ」

「シノちゃんとはマブだちでも友情は友情、試練は試練だチュン。シノちゃんはヤタガラスの中でもスゴい、金色のヤタガラスを指指してガンバってるから、力を貸してチュン」

「友だちに言ってしまった、するどい言葉を「ま、いつか」で終わらせなかった凜々だからこそ、ことワザ使いにふさわしいって思ったノ。けど、おどろいて逃げられたらどうしようとか、声をかけるのにモタモタしているうちに季節が変わって、今……ナノ」

「悩みすぎです」「全くッパ……」

天狗様や殿があきれている。あはは、ツツコミがするどい。

けど、私も同じ。瑞花とケンカした一学期のあの日から、ずっと悩んでる。だから。

「わかる。初めましての子への声かけて勇氣がいるし、声のかけ方も悩むよね……」

瑞花にヒドいことを言った次の日から、健斗以外のクラスの子たちの視線が変わった。

物言いたげな視線に、口にしてしまった言葉といっしょに自分も消えなくなった。

そんな私を見つけて、声をかけようとしていた人……でなく、スゴいクラスがいた。

そう自覚したら、じわじわと勇氣がわいてくる。

「よっし、世のため、東雲の目標のため、ガンバろう。あらためてよろしくね東雲！」

グーにして突き出した拳を「よろしくナノ！」と、東雲のくちばしがコツンとつつく。

「では話がまとまったところでことワザ使いになった証として、贈り物を渡ししょう」

「天狗様からのプレゼント！ 絵本で読んだ、八手のうちわで空を飛べたりとか？」

一気にふくらむ期待。だけど天狗様がさし出したのは、赤と白の和風なりボンがついた、ただの黒いポーチ。えっつ、これがプレゼント？

「目は口ほどに物を言ってるノ……天狗様もちゃんと説明してくださいナノ」

「……はい。これはことワザ使いの証でもある不思議な袋です。ことノケ帳もすっぽり入りますし、矢も……実演したほうがいいですね。まずは水引に矢を近づけてみて下さい」

水引——赤と白の和風なりボンに破魔矢を近づけると、シュルツ！

矢が水引の中に吸いこまれていった。すごい、魔法のポーチじゃん！

すごいもの、もらっちゃったと、感激していると。

「それでは東雲とことノケたちをお願いします」

天狗様は背中に生える翼をバサリと広げ、空のかなたへ飛んでいってしまふ。

「もう行っちゃった……こういうのをカラのギョウザ、だっけ？」

「それをいうなら、鳥の行水ナノ。天狗様はカラスもビックリな神速ナノ」

青く高い、秋の空を見上げて、頭の中を整理する。

開いたノートからは動物が飛び出し、しゃべるカラスやカッパたちに出会い、言ノ羽神社の伝説の天狗様にも会った——夢みたいな出来事の連続だけど、本当に経験したこと。

（言葉を大切にして、心のブレーキをかけながら、東雲の目標をかなえるよ!）

水引にそつと手をあてた時、キーンコンカーン!

色んなことがあつた休み時間終了のチャイムが聞こえてきた。

第3話 田中くんのラブレター!?

五年二組の教室に急いで戻ると、大山先生がすぐに来て、理科の授業を始める。

持つてくる教科書をまちがえたりせずに、先生がいつもの調子に戻つて、私もみんなもホッと胸をなでおろす。

「凛々がことワザ使いになり、余を帳面に戻したからッパ」

ことノケ帳の中からカッパのことノケ・殿の声が聞こえてくる。

二時間目まで先生の肩にいた殿の姿をクラスの中で見えていたのは、私だけ。

ほこらしい気持ちの中、前に出て問題を解く子の背中をながめ、ふと考える。

（うちのクラスには、ことノケに取りつかれた子がまだいるみたいだけど……だれがなんのことノケに取りつかれているのかな?）

姿勢はそのまま、目だけで教室の様子をうかがう。

健斗や昨日の遠足でグループに入れてくれた静海さんはいつも通り、真剣な姿勢で授業を受けてるし、ボスキヤラ的存在の谷山さんは「ヒヒッ」としゃつくりをして、近くの子と小声でおしゃべりしてる……みんな、いつも通りだね。

「おおつ、字が読みやすくなったな、田中くん!」

大山先生がはずんだ声で田中くんをほめ始めた。

三度の飯よりギャグが好き。明るく、ゆかいな性格の彼の将来の夢はお笑い芸人。

キッズお笑いコンテストに出たり、顔をかくしてギャグの動画をネットに投稿したり。

バズって有名になった時のため、字をサツと書けるよう、準備してると言うけど。
先週、私と日直だった日の学級日誌も「マッハ書きだ!」と、ざつで読みづらかった。
「本当だ。急に上手になって……んんっ、急に?」

それって、まさか——机から身を乗り出して、じーつ。

田中くんを目をこらしていると「コゝボボ♪」とオレンジ色の服を着て、手には筆を持つた、小さなおじいさんが彼の頭の後ろからピョコツと登場!

それなのに私以外、だれもおじいさんの存在に気づいていない。

これって一々二時間目、殿が先生に取りついていていた時と同じ状況!

「殿が言った通りナノ、これもことノケのしわざナノ……ッ!」

また私の机の中にかくれた東雲が興奮気味にさけぶと。

「カー……ッ!」

カラスの鳴き声が教室いっぱいにひびき「カラスの声、どこから!」とみんなビックリ!

「わ、私が机を動かした音で……ほら、ギョカギョカ……ッ!」

ムリがあるけど、机の中を見られたら大変。

机を前後に動かして、私はその場をごまかすのだった。

三時間目と四時間目の間の休み時間。

私は机につぶして、ぐうぐうじゃなくて、東雲と作戦会議!

「あのことノケは平安時代に活躍したお坊さん・弘法大師様の百分の一の魂から生まれたことノケ・コボ様ナノね。外に出てすぐ、コボ様はあの子に取りついたノね」

「弘法大師……あつ、わかった。『弘法筆を選ばず』のことワザの効果がでてるんだね」

図書室で借りた、ことわざ・慣用句辞典の内容は、バッチリ身についている。

『弘法筆を選ばず』とは、字が上手な弘法大師はどんな筆を使っても上手に字を書く。

名人は使う道具に関係なく、立派な仕事をするという意味なんだ。

急に田中くんの字が上手になったのも、このことワザが影響してる気がする。

「その通りナノ! さあ今すぐ、ことノケ帳に戻すノ」

「きれいに文字を書くようになったんだから、そのままでもいいよ。そっちのほうが私たちも助かるし……?」

「ダメナノ。このまま字が上手になっていくと、あの子は書道家になる運命ナノ！」
くちばしでツンツンツン！ 東雲が私のお腹を軽くつついてきて、くすぐりたい。

「ことノケに宿る言葉の力・言霊は偉大なぶん、人への影響力も強烈ナノ。字がどんどん上達して、そのうち賞をとったら、あとはトントン拍子。書道家の道を一直線ナノ」

「うーん、そうはならないと思う。東雲は田中くんのマッハ書きを知らないから……」

首をかしげていると、キンコンカンと四時間目スタートのチャイムが鳴る。

四時間目も「いいね！」「美文字だね！」と、田中くんはほめられまくり！

今まで「マッハ書きはヘビ文字」と、イジられてきた田中くんは「だろ？」と、得意げ。

「三学期の書き初め大会、入賞するかもな」と、先生がうなずいた時、ひゅうううううっ！

窓から風が吹きこみ、教室の空気が変わった——ような気がした。

「芸能人より書道家目指そうよ」

「つまらないダジャレより美文字のほうがバズるぜ」

「は？ ちょっと待てよ、書道家になんかなんねーしーの忍び足！」

とまどう田中くんをさしおいて、どんどんもり上がる、クラスメイトたち。

みんな、いきなりどうしたの……？

「効果覷面。言霊の力が彼を書道家の道へと導き始めたノ！」

キョトンとする私のお腹をまた東雲が軽くつつく。

この流れは四時間目の授業が終わり、給食の時間になっても続いていて。

「文字は性格を表す。ギャグよりきれいな字を書くほうが大事だよな」

いつもなら「田中にはみんなを楽しませる才能がある」と、芸人になる夢を応援する健斗

まで正反対のことを言い始めている。お、おそるべし、言霊の力！

早くコボ様をことノケ帳に戻さないと——私もやつと決意をかためる。

みんなから「書道家になりなよ」と言われ、不機嫌な田中くんは給食を早食いして、大ま

たで教室を出ていく。人目が多い教室を出た、今がチャンス！

私も急いでお昼を食べ終えて、ろう下に出るけれど、彼の姿はもうなかった。

けど、向かう場所には心当たりがある。田中くんにとっての、ヒミツ基地だ。

彼は瑞花と幼稚園が同じで仲よしだった。

瑞花にさそわれて、ヒミツ基地での彼のひとりコントの練習を何回か見に行ったんだ。

おもしろくて、声を上げて笑っていたら先生に見つかって、三人そろって怒られた……

その思い出のヒミツ基地とは、体育倉庫！ 倉庫の重いドアを開けると——いたっ！

「うんだよ。木戸瀬もくだんねえこと言うのやめて、書道家になれって？」

「田中くんの夢は芸人でしょ。用があるのは田中くんじゃなくて……」

口をへの字にする田中くんの頭の上を見ると「コボ、コボボボッ！」

コボ様が両手をふって、あわてふためく。

「コボ様も長く取りつくのは、よくないとわかってるノ。でも、この子に字を書く時のコツを教えたいから、放課後まで待つてほしいと言ってるノ」

「教えるって、いつ……あつ！ もしかして五時間目の水習字の時間？」

上着の中にかくれる東雲の通訳に「コボボ！」と、コボ様は真剣にうなずく。

「絶対だよ」と言うかわりにジッと見つめてから、私は田中くんに視線を戻す。

「字が上手になったただけだよ。芸能人になる夢、私は応援してるから！」

きつと瑞花も——目を大きく開く田中くんに手を振り、体育倉庫を出る。

そして、五時間目。田中くんが水習字でどんな美文字を書くのか、みんなが注目。

それなのに、田中くんは筆を持ったまま、「ぐう」と爆睡！

「なるほど姿勢か」「トメ・ハネ・はらいね」と時々、寝言を言いつつ、筆を走らせる。

（コボ様が取りついた影響とはいえ、器用だなあ）

感心しながら、花より団子——私も今日の課題・好きな言葉を紙に書く。

うーん……鉛筆やペンで書くより、筆で書くとバランスが悪くなる。

自分が書いた文字とにらめっこしていると「田中くん、起きてるかい？」

大山先生が田中くんの肩を叩く。するとピョンッ！

コボ様が田中くんの頭から飛び降りて、トコトコと私の元へ走ってやつてくる。

「下校したらずぐ、ことノケ帳に戻すから少し待つてね」

両手で抱き上げたコボ様をそっと机の中に入れると「せまいノ、定員オーバーナノ！」
中にいる東雲の声がするけど、聞こえないフリ。そして、田中くんの文字はというと。

「あれ？ 今までの……いや、前よりは読みやすいな。この字は愛……だな」

元通り……ではなく、少しくまくなったみたい。

言霊の力により、おかしな流れになっていた教室の空気も元に戻っていく。

（よかった！ 自分の将来の目標は先生やまわりの言葉でなく、自分で決めたいよね！）
ほっと胸をなでおろしていると、キンコーンカーン！

五時間目終了のチャイムが鳴り、色々な事件が起きた一日がやっと終わった。

帰りの会が終わるなり、私はコボ様と東雲を上着の下にかくして、早足で下校する。

向かったのは言ノ羽神社。境内にあるベンチに座ってから、コボ様と東雲を外に出す。

コボ様は「コボボッ！」と、私に向かって三回連続でおじぎをしてきた。

「時間をくれたことに感謝してるノ。あの子、夏休み前に転校する好きな子にラブレターを書いたけど、悪筆で気持ちが伝わらなくて、後悔していたから力になりました……らしいノ」

東雲の通訳に「その相手って、もしかして瑞花？」と、私はハッと息をのむ。

それは瑞花とギクシャクする、少し前のころ「昨日も暗号をもらったの！」と彼女は田中くんから手紙をもらったと教えてくれた。

田中くんは時々、ダジャレからひらめいたナゾかけの紙を瑞花に渡し「マッハ文字の暗号

は読めないってば」と注意されていた。

手紙を渡したころの彼はなぜか元気がなく、ダジャレもしばらくキレがなかった。

（きつと、気持ちが伝わらなかったから、落ちこんでいたんだ……！）

今年の二月。田中くんに特別なチョコをあげていた瑞花。

ナゾかけにまぎれさせて、転校前に自分の気持ちを手紙にしていた田中くん。

わわわわ、両思いじゃん！ 瑞花に教えたほうがいいよね？ だけど。

「転校先で新しい友だちとカレをもう作っているよ」と、暗い気持ちが止めてくる。

……うん、そうだよね。私が連絡するのも、今さら両思いと教えられても、困るよね。

「凛々、まずはコボ様をことノケ帳に戻すノ！」

東雲の声が私を現実に戻す——そう、今は友だちより、ことノケ集めが最優先！

天狗様からもらったポーチの水引リボンをなでると、ポンツと破魔矢が飛び出てくる。

「凛々しくリリース、ことワザリリック、お帰りください、コボ様っ！」

破魔矢をかかげると、シュウウウウポンツ！

コボ様がことノケ帳の中へ吸いこまれるように帰っていく。これで三人目だね。

ことノケ帳を開くと、カッパの殿、鳥の鈴、そしてコボ様。

今日、出会ったことノケたちが楽しそうにおしゃべりしている。

ことノケ帳は紙なのに、動画みたいに動いていて、不思議な感じがする。

ことノケたちのやりとりをしばらく見つめていると「いた、木戸瀬！」と田中くんの声が出て、私は破魔矢を急いでポーチに戻す。

「た、田中くん、どうしたの？」

「なあ、この手紙ちゃんと読めるか？ どう読めるか音読してほしい」

彼がさし出したのは「瑞花へ」からはじまる、自分の気持ちをつづった手紙。

まっすぐな言葉で書かれていて、かーつと顔が熱くなる。

「わーっつ、つい読んじやったけど、声にするどころか私が読んでいいの!？」

「いい。俺の字、もう暗号じゃないよな？ 超愛してるが起受してるに見えないよな？」

自信なさげな表情をする田中くん——あ、そっか！

コボ様から字を上手に書くコツを教わったから、瑞花にもう一度、気持ちを伝えようとしているんだ。すごい、応援したい！ ことノケ帳の中でコボ様も手を叩いている。

「うん、読める！ 今度こそ気持ち伝わるよ！」

田中くんは顔をパツと明るくして「なら送ってみる！」と、うなづく。そして。

「でさ、木戸瀬は瑞花と連絡、もう取ってねーの？」

さりげない質問に胸がズキンと飛び跳ねて、苦い記憶がよみがえる。

「……うん。転校先で楽しくやってると思うし、連絡するのも……ね？」

ひどい言葉で突き放したのは、私だから、きつと迷惑になる。

グツと飲みこんだ言葉といっしょに気持ちもしずんでいく。

「そうか？ 木戸瀬から連絡きたら喜びそうだなあ……うちの母さん、アイツの住所を知ってるから、俺が手紙を送って様子を探るぜジェノベーゼ！」

へへっとなんて笑い、回れ右。田中くんは神社の鳥居をくぐり、帰っていく。

私との関係はいいから、田中くんと瑞花、うまくいくといいなあ。

ベンチに座り「うーん！」とのびをして、一休み。

秋のすずしい風が心地よくて、目を閉じていると東雲が「カァ！」と、鳴いた。

「一日で殿、鈴、コボ様と三体のことノケを見つけたのは感服・感謝・拍手喝采ナノ！」

「えへへ。あつという間にピカピカな金のヤタガラスになれそうだね」

「なれないノ、鈴たちはおだやかな性格だから、ことノケ帳にすぐ戻ってくれたノ！」

「ウッキッキ〜！ そうそう、オイラはかんたんに戻ってなんか、やんないツキ？」

頭上から東雲の声に重なるように聞こえた声——だれっ!?

上を見ると茶色の体に長いシツポ。神社のご神木にサルがぶら下がっていた。

「言葉をしゃべるサル……キミ、サルのことノケだね！」

「そうツキ。オイラはサルのことノケ・舞調！ やつと外に出られたんだから、すぐに戻ってやんないツキ。ポンコツちゃん、こつちだツキ〜おしりペンペ〜ン！」

突き出した赤いおしりを叩き、舞調は神社から大通りへと飛び出していく。

ムッキ〜ツ！ だれがポンコツよ？ すぐに見つけて、つかまえてやるんだから〜つ!!
ベンチから勢いよく立ち上がり、後を追いかけるけど、舞調の姿はどこにも見えない。

神社の入口でキヨロキヨロしていると、鳥居の上から東雲の声が降ってくる。

「こういう時こそ、ことワザを使うノ。ことワザ使いになった時から、凛々は体についてのことワザが使えるようになってるノ！」

「そうだった！ 殿も話していたね……よし！」

ポーチから破魔矢を取り出しながら、体についてのことワザを考える。

頭から順番に考えていこう。頭でしょ、次に顔でしょ。顔には目、鼻、口……わかった！

「凛々しくリリース、ことワザリリース、目を皿のようにする！」

その瞬間、ググツと望遠鏡をのぞくみたいに視力が一気に上がり、遠くまでよく見えるようになった。道の先、いない。信号機やビルの上もない。

「さすが舞調。傍若無人で逃げるのも、かくれるのも速いノ」

「もう東雲つてば、感心してないで探してよ〜」

「あれ？ 凛々、鳥居の前でなにしてるの？」

横から声がした瞬間、パリンとガラスが割れるような音がして、私の視力が元に戻る。
振り向くと、塾のリュックをせおった健斗がとなりに立っていた。

「健斗！ 今さっきね、サルを見たの。だからどこにいるのかな〜つて」

「探したら危ないだろ。最近(さいきん)は街まできたサルやクマが人をおそうニュースもあるし……見つけたら、まず大人に報告(ほうこく)。大山先生も前に言ってたぞ」

それはそうなんだけど、今、探しているのは動物のサルじゃなくて、ことノケ。

「じゃあ、学校に戻って、先生に教えるよ。健斗はこれから塾、だよな？」

「そう。今日はこれから小テスト、来月は全国統一テストがあつてさ……」

健斗の声が暗くなる。お父さんのすすめで有名中学校の受験を目指しているから、家でも学校でも勉強づくし。色々大変そうなんだよね。

「健斗なら、いい点とれるよ、だいじょうぶ！」

そう笑顔で見送って、私は学校に戻る——フリをする。

遠回りの道を進み、舞調がかくれていないか、注意深く観察して、だれもいない家に帰る。くやしいけど、その日は結局、舞調を見つけることができなかった。

第4話 健斗のホントの気持ち

次の日は土曜日。今日こそ舞調を見つけるぞ……のハズだったのに。

「ええっ、健斗がおじさんと大ゲンカして、家出……っ!?」

マンションの前で健斗の三つ年上のお姉さん・星風さんとバツタリ！

彼女から聞いた話に私は耳を疑う。

「そう。昨日は塾を勝手に早退して、小テストの結果も五点。帰宅したところをお父さんが注意して、大ゲンカ。部屋に閉じこもっていたはずなのに、今朝から姿が見えなくて」

「昨日神社の前で会った時は、少しつかれた感じだったけど……」

小テストの点数が悪かったのは、つかれのせいかもしれない。

けど、健斗が大人に反抗的な態度を取るなんて、信じられない。

習い事も「月謝は父さんたちが働いたお金。ムダにできない」とサボらずに行くタイプ。

「ちなみに健斗とお父さんのケンカって、どんな感じだったんですか？」

「ふふ、それがね。急に後ろをむいておしりをたたいたのよ。いつもとちがいすぎて、私もお母さんも笑いをこらえるのが大変で……健斗もついに反抗期かなーって」

いつもとちがいすぎて——ああもうっ！ 心当たりが一つしかないよー！

「それはおしりペンペン！ サルのことノケ・舞調のしわざナノッ！」